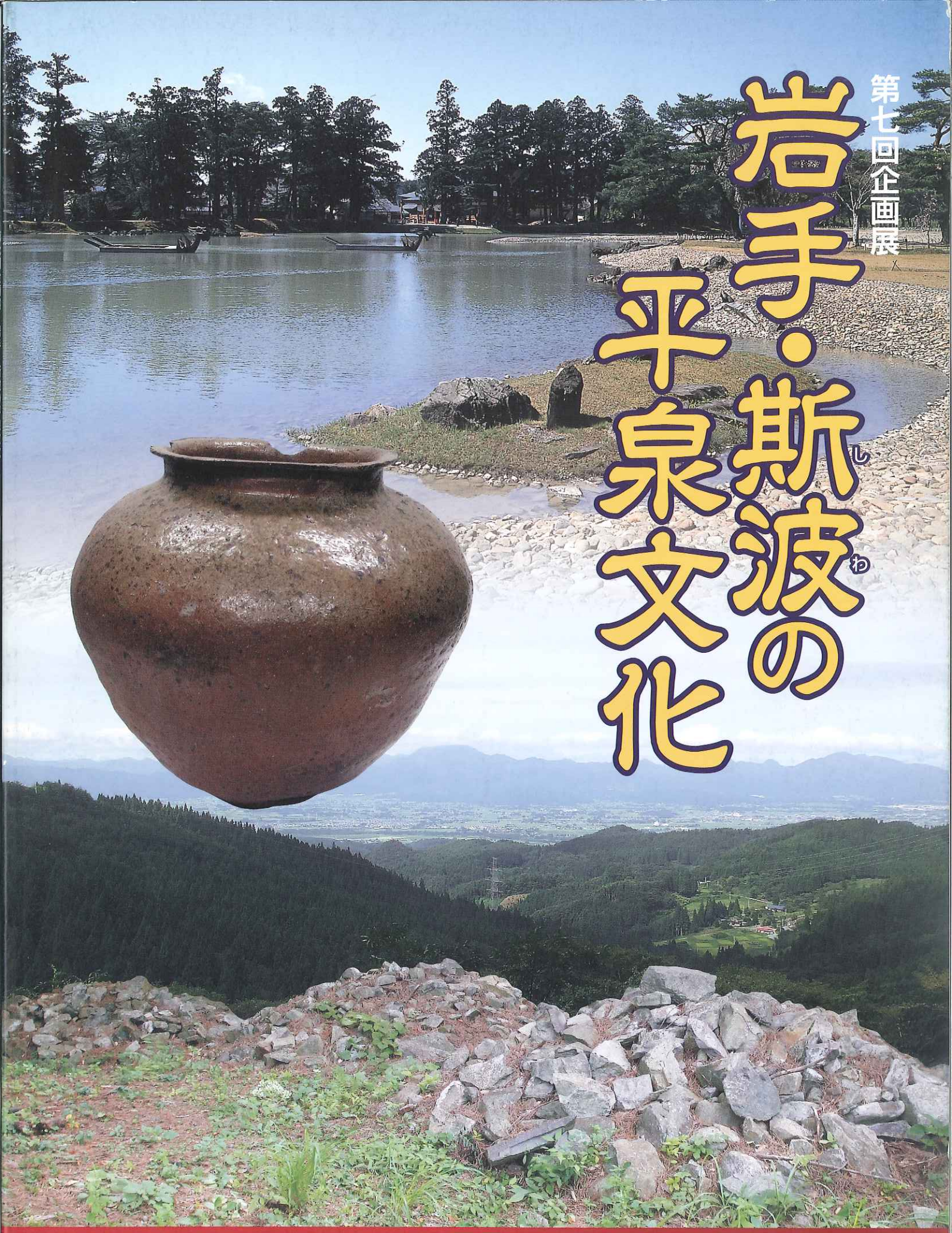


第七回企画展

岩手・斯波（し わ）の平泉文化

盛岡市遺跡の学び館

ごあいさつ

前九年、後三年の合戦の後、奥羽の統治者となった藤原清衡は、陸奥の中心地平泉に中尊寺を建立し、浄土思想に基づく平和な国づくりを進めました。今から903年前のことです。以後、奥州藤原氏は基衡、秀衡、泰衡まで4代続き、その支配域は奥羽一万余村に及びました。

現在の盛岡市周辺は、当時の岩手郡、斯波(志和)郡にあたります。藩政時代、岩手県域は仙台藩と盛岡藩に分割統治されていたためか、今日、平泉と盛岡地域とでは、幾分距離感があるのは否めません。しかし、歴史上では、平泉以前には、岩手郡厨川に安倍氏の拠点が置かれ、平泉と同時代の斯波郡には、奥州藤原氏一門の樋爪氏が居住し、北から平泉を支えていたことが明らかです。さらに、岩手郡のなかにも、平泉との関連を示す居館跡や村落跡、経塚など、多くの遺跡が発見されております。このことから、当時、平泉と岩手郡、斯波郡は、たいへんに深いかかわりがあり、また、平泉文化が色濃く浸透した地域であったことがわかります。

今回の企画展では、近年の発掘調査成果を中心に、平泉と岩手郡、斯波郡との密接な関係を紹介いたします。この展示を通じて、平泉文化を、より身近に感じていただければ、幸いです。

平成20年11月

盛岡市遺跡の学び館

目　　次

Ⅰ　平泉前史　～前九年・後三年合戦～ …… 4
Ⅱ　都市平泉とその文化 …… 8
Ⅲ　岩手・斯波の平泉文化 …… 12
Ⅳ　文治五年奥州合戦と鎌倉幕府の支配 …… 26

開催要項

開催期間　平成20年11月11日から平成21年2月1日まで
（年末年始及び月曜日と毎月最終火曜日は休館となります）
主　　催　盛岡市遺跡の学び館
場　　所　盛岡市遺跡の学び館企画展示室
開館時間　9:00～17:00（入館は16:30まで）
入 館 料　一般　200円（20名以上の団体の場合1名160円）
小中学生　100円（20名以上の団体の場合1名80円）

特別講演会
演　　題　「身近にある平泉の文化遺産」
講　　師　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所長　　相原　康二 氏
日　　時　平成20年11月30日（日）13:30～15:30
会　　場　盛岡市遺跡の学び館研修室（定員80名）
聴　　講　無料

後　　援

（順不同）

岩手考古学会　岩手史学会　岩手日報社　朝日新聞盛岡総局　読売新聞盛岡支局
毎日新聞盛岡支局　時事通信社盛岡支局　共同通信社盛岡支局　河北新報社盛岡総局
日本経済新聞社盛岡支局　産業経済新聞社盛岡支局　デーリー東北盛岡支社　盛岡タイムス社
岩手日日新聞社　NHK盛岡放送局　IBC岩手放送　テレビ岩手　めんこいテレビ
岩手朝日テレビ　岩手ケーブルテレビジョン　エフエム岩手　ラヂオもりおか
acute（アキュート）　マ・シェリ　情報誌游悠　（株）総合広告社

協　力　者

（順不同敬称略）

機関等　中尊寺　毛越寺　岩手県教育委員会　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
岩手県立博物館　岩手町教育委員会　紫波町教育委員会　紫波町商工観光課
滝沢村教育委員会　八幡平市教育委員会　平泉町教育委員会　矢巾町教育委員会
北進考古学資料室
個　人　井上雅孝　岩淵計　及川司　鎌田勉　佐々木務　佐藤弘　佐藤嘉広　桜井芳彦　白濱洋一
志羅山浩順　菅原修　菅原圭二　菅原光聴　高橋昭治　千葉正彦　南洞頼賢
西澤正晴　西野修　羽柴直人　東本茂樹　三浦謙一　八重樫忠郎

○開催期間中、一部の資料を展示替えする場合があります。

○展示図録の執筆と編集
盛岡市遺跡の学び館　室野　秀文　相馬　容子　佐々木　逸人
挿図作成にあたり、盛岡市遺跡の学び館　佐々木由子の協力を得た。

○表紙・中表紙写真
表　紙／毛越寺大泉ヶ池　内村遺跡常滑大甕　紫波町風景と山屋館経塚（復元）
中表紙／白坂薬師堂　瑞花双鳳八稜鏡鏡面線刻五仏
（岩手県指定文化財・八幡平市教育委員会所蔵及び写真提供）

Ⅰ　平泉前史　～前九年・後三年合戦～

蝦夷支配の変容と在地豪族の台頭

平安時代の初め(794)に現在の京都に都が置かれました。このころ陸奥北部の北上盆地には、延暦21年(802)に胆沢城(奥州市)、翌22年(803)には志波城(盛岡市)が築かれました。これらの城柵は、朝廷の東北支配を北進するための、軍事、行政拠点としての役割を担っていました。弘仁4～5年(813～814)には徳丹城(矢巾町)が築かれ、志波城の機能を継承します。

7世紀以来、朝廷の蝦夷政策(征夷征討)は継続して押し進められてきましたが、この度重なる軍事行動や、頻繁な都の移転などにより、国家財政、社会ともに大きく疲弊したため、当時の朝廷では政策の転換を迫られていました。徳丹城も9世紀半ばには廃止され、陸奥国では胆沢城が、出羽国では秋田城(秋田市)、払田柵(大仙市)が、最北の城柵となります。こうした過程で、地元の豪族や有力者などが国家の役人に登用され、現地支配の実務は、彼等にゆだねられていきます。その一方で、国司や鎮守府将軍などが、直接現地に赴くことはまれになり、朝廷の蝦夷支配は、地元豪族を介した、間接的で広域的な支配形態へと変わっていきました。

安倍氏と前九年合戦

陸奥北部の有力者のなかで、鎮守府胆沢城の官人(役人)として、国家権力を背景に台頭したのは安倍氏でした。11世紀の安倍頼良のころには、胆沢城の管轄域であった胆沢、江刺、和賀、稗貫、斯波、岩手の六郡(奥六郡)を実質的に支配するに至りました。これと同じころ、出羽北部で大きな力を持っていたのは、雄勝、山本、平鹿の山北三郡に勢力を拡げていた清原氏でした。前九年合戦当時の当主は清原光頼ですが、清原氏もまた、払田柵や秋田城の官人として、国家権力を背景に力を伸ばした一族でした。安倍頼良等の行動は、奥六郡内にとどまらず、しだいに磐井郡や栗原郡にまで進出し始めたため、永承6年(1051)これを制止しようとした陸奥国司藤原登任の軍は、鬼切部(栗原市鳴子)で安倍氏の軍と衝突し、国司軍は大敗します。これが前九年合戦(奥州十二年合戦)の始まりです。

後任の陸奥守には源頼義が任じられ、天喜元年(1053)には鎮守府将軍を兼任します。頼義は出羽の清原氏と結び、その援軍を得て、安倍氏を追い詰めます。康平5年(1062)、鳥海柵(金ヶ崎町)から追われた安倍貞任、安倍宗任、藤原経清らは、岩手郡の厨川柵、嫗戸柵を拠点に、源頼義と清原武則らの軍を迎え撃ちますが、同年9月14日、柵とともに、安倍氏は滅亡し、前九年の合戦は収束します。この時斬首された藤原経清は安倍頼時の娘婿であり、遺児清衡は母とともに清原家に入りますが、後三年合戦を生き抜き、後に平泉を開きます。

清原氏と後三年合戦

前九年合戦の収束後、清原武則は陸奥鎮守府将軍に任じられ、安倍氏の奥六郡支配を引き継ぎます。それまで、平氏、源氏、藤原氏など、有力な軍事貴族が担ってきた鎮守府将軍職に、奥羽の豪族がはじめて登用されました。

延久2年(1070)、陸奥守源頼俊は、清原貞衡(真衡?)を将軍に、閉伊七村、衣曾別嶋(宇曾利か?)の荒夷を征討します。当時閉伊地方はまだ朝廷の支配領域外であり、この大規模征討の主力は、清原氏の保有する、強大な軍事力であり、これを中核に、奥羽の広範な地域から、軍を動員していたと考えられます。

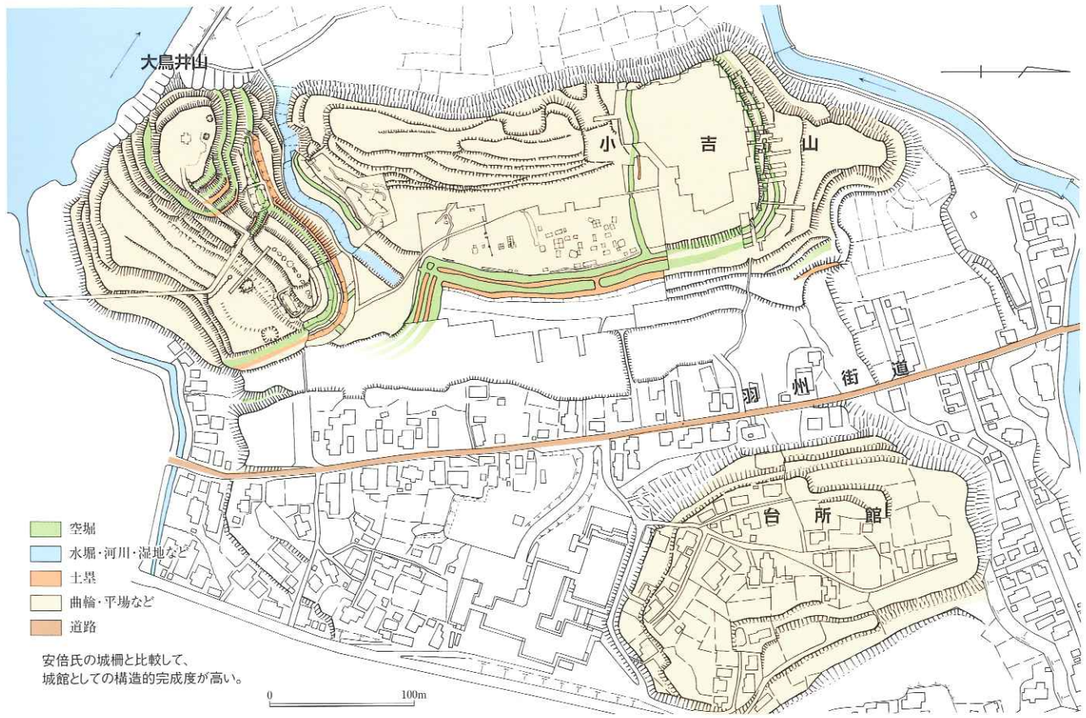
永保3年(1083)総領の清原真衡と、弟の家衡、清衡との間に内紛が起こります。陸奥守源義家は真衡を助け、清原清衡、家衡を降服させます。後三年合戦の始まりです。しかし、間もなく真衡が死去したため、奥六郡は清衡、家衡で分割統治することになりました。

応徳2年(1085)今度は清衡と家衡、武衡が一族の主導権をめぐって争います。源義家は清衡に味方し、家衡と武衡は沼柵(横手市)に籠もります。翌年、家衡、武衡は、より堅固な金沢柵(横手市)に篭城したため、源義家、清原清衡、吉彦秀武等はこれを兵糧攻めにします。寛治元年(1087)12月、金沢柵は落ち、後三年合戦は終わりました。この結果、清原清衡は安倍氏、清原氏の旧領をすべて継承することになり、寛治3年(1089)には、江刺郡の豊田館に居住しました。

前九年、後三年合戦関係地図(岩手日報社2001を一部改変)

安倍氏の城柵　―鳥海柵跡―(岩手県胆沢郡金ヶ崎町)

清原氏の城柵　―大鳥井柵跡―(秋田県横手市)



Ⅱ　都市平泉とその文化

北の政権都市平泉と仏国土の建設

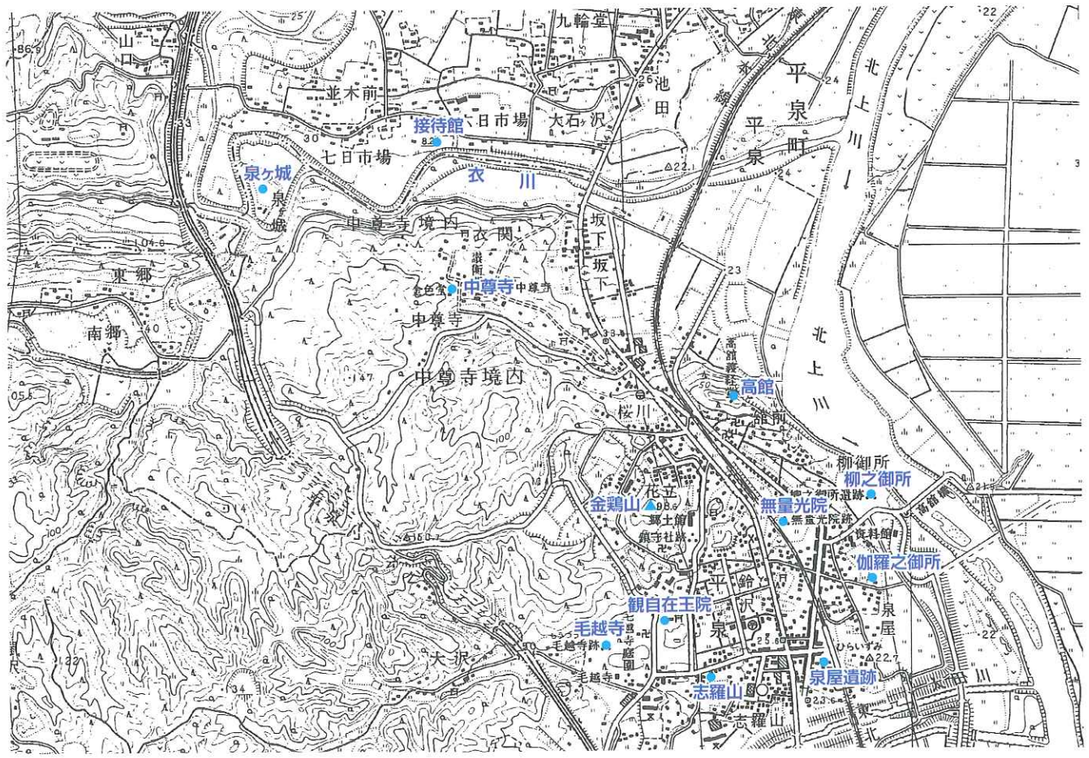
後三年の合戦終息ののち、藤原（清原）清衡は、江刺郡豊田館から平泉に移転。長治2年（1105）中尊寺造営に着手します。大治元年（1126）の供養願文には「前九年、後三年合戦の犠牲者を、敵味方の区別なく弔い、数多の御霊を浄土へ導き、奥羽両国に平和な仏国土を築きたい」という、不戦の願いがこめられました。さらに平泉を中心として、南は白河から北は外ヶ浜までの道程の一町毎に、金色の阿弥陀如来を図絵した傘塔婆を建立しました。こうした藤原清衡の意思は基衡、秀衡、泰衡へと受け継がれ、寺院の整備に合わせて、街も拡がり、都市平泉が形成されていきます。そして奥羽各地の村々には、阿弥陀堂などの寺院や神社が建立されました。

平泉の街と構造

初代清衡の時代には、衣川南岸の関山丘陵上に中尊寺、その金色堂の正方（正面方向）、北上川に面した舌状台地には平泉館（柳之御所遺跡）が築かれました。関山は奥大道が通じていた場所であり、柳之御所遺跡中心部から高館南麓を通じ、中尊寺金色堂に至る道路の存在も推定されています。柳之御所遺跡の堀外部地区の道路沿いには、藤原氏一門の屋敷と推定される、方格状の溝で区画された屋敷跡も複数確認されています。

二代基衡の時代、南西の丘陵裾に毛越寺、観自在王院が創建され、幅20mの東西方向の街路と、これに交差する南北街路が整備されます。吾妻鑑によれば、このあたりの街路沿いには数十棟の高屋（高床式倉庫）が建てられていたとあり、志羅山遺跡ではその遺構も確認されています。この東西道路の両側には、中島池のある邸宅跡や大形四面廂建物も確認されており、身分の高い階層の居住地であったことが判明しています。

三代秀衡の時代には、柳之御所遺跡の西側には無量光院、柳之御所遺跡の南には伽羅之御所が構えられ、南の泉屋遺跡周辺まで市街地が広がります。この泉屋遺跡では先の毛越寺、観自在王院前から延びる東西の道路に、幅20m余の南北道路が交差しており、その北の延長は伽羅之御所遺跡の東側を通じて、柳之御所遺跡南側に至るものと推定されています。このころの平泉館が、南を正面にしていたことがわかります。また、平泉の概ね鈴沢池から北側の一帯は、館や寺社など、平泉の中枢域と藤原氏一門の居住地。志羅山遺跡から泉屋遺跡にかけては、武士、役人や手工業者の居住地と考えられます。



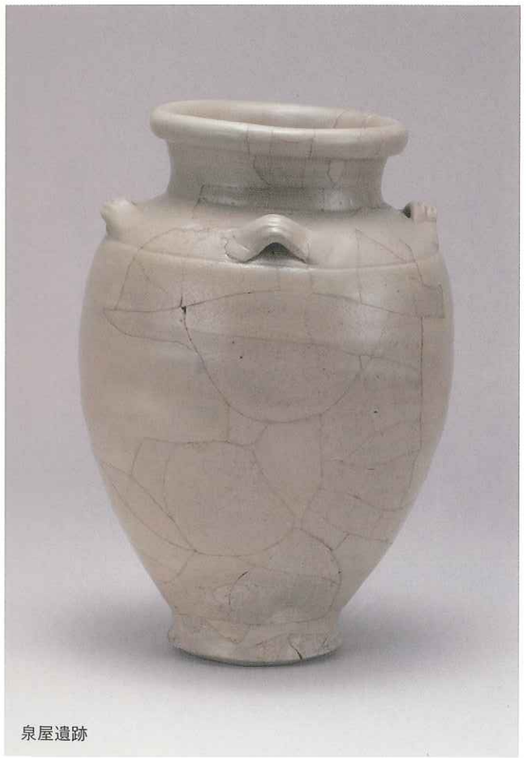
平泉全体図（1:25000）

中尊寺金色堂新覆堂

毛越寺大泉ヶ池（平泉町教育委員会提供）

中尊寺経蔵

毛越寺遺水跡の調査（平泉町教育委員会提供）



泉屋遺跡

白磁四耳壺（複製）（岩手県埋蔵文化財センター所蔵）

毛越寺大金堂（円隆寺）跡礎石

毛越寺南大門跡の調査（平泉町教育委員会提供）

Ⅲ　岩手・斯波の平泉文化

仏教文化の定着

岩手郡と斯波郡は、かつて奥六郡と呼ばれた地域の北部に位置します。この地域にも、平安時代の9世紀後半から10世紀ごろには仏教文化が定着しております。八幡平市西根の白坂薬師堂からは鏡面に五仏を線刻した八稜鏡が発見されているほか、岩手町一方井のどじの沢小堂跡からは、八稜鏡や小鰐口が出土しています。また、どじの沢小堂跡近くの黄金堂遺跡では、平安時代の仏堂の遺構が確認されたほか、大形仏像の羅髪や鉄馨が出土しています。このほかにも、紫波郡紫波町高水寺には、平安時代後期の十一面観世音像が存在するほか、盛岡市玉山区の東楽寺には、近隣から集められた、平安時代後期の十一面観世音像や金剛力士像が現存しております。こうした仏教文化は、胆沢城、志波城、徳丹城の設置のころ、朝廷の東北政策とともに入り、やがて在地の豪族層によって村々に寺院や仏堂が建てられて、地域に深く浸透していきました。

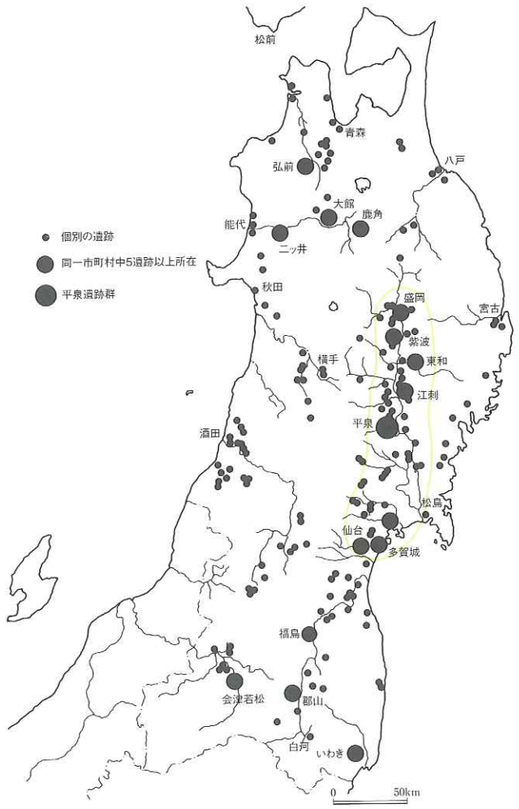
平泉期の岩手郡、斯波郡の遺跡

東北地方における12世紀、平泉時代の遺跡の分布状況を見ると、白河から平泉を通じて外ヶ浜に至る、当時の幹線道路、奥大道沿いに集中しているのが分かります。このうち、遺跡の分布が特に濃密な地域は、南は宮城県仙台市、多賀城市付近から、平泉をすぎて、北は盛岡市周辺に至るまでの範囲であり、これが、奥州藤原氏の支配や文化の影響が、最も強力に及んだ地域であったと考えられます。つまり、現在の盛岡市周辺、当時の岩手郡、斯波郡は、奥州藤原氏の直接支配域の内、その北端であったことが分かります。

南の斯波郡には、藤原清衡の四男清綱が入部して樋爪氏を名乗ります。清綱の嫡子、樋爪太郎俊衡の居館は現在の紫波町南日詰赤石小学校付近の比爪館とされています。平野部の微高地に築かれ、幅の広い堀で囲み、南側は五郎沼に面しています。比爪館と同様の居館跡は、岩手郡の厨川のうち、現在の盛岡市大館町、稲荷町に跨る稲荷町遺跡で確認されています。ここは雫石川北岸の段丘先端部にあり、北側から東側を堀で区画しています。こうした居館のほかにも、盛岡市浅岸の堰根遺跡、上村屋敷遺跡、前野遺跡、下米内の落合遺跡では、大形の掘立柱建物の屋敷遺構や小形建物の村落遺構、仏堂または社殿跡が確認されています。これらの遺跡からの出土土器、陶磁器の内容は、平泉遺跡群や比爪館跡の出土遺物とも共通するものです。岩手郡では北上川西岸地域では厨川が、東岸地域では中津川沿いの地域が、奥州藤原氏の拠点であったようです。

樋爪氏もまた、寺社の造営や保護に力を注ぎ、当時の末法思想のもと、未来への経典保存のため埋納した、経塚の構築も盛んに行いました。紫波町山屋の山屋館経塚を初め、南日詰遺跡経塚や新山神社経塚、盛岡市湯沢の湯壺経塚、繋の一本松経塚があり、常滑、渥美、珠洲などの壺や甕に経典を入れて埋納し、上部を礫や土で被覆し、塚を築いたものが多いようです。このほかにも、矢巾町城内山頂遺跡や、紫波町大巻の立花遺跡、盛岡市内村遺跡、台太郎遺跡などで、渥美の壺や、常滑の大甕が単独で出土しており、経塚または、仏堂や社殿造営などに関わる地鎮、鎮壇の可能性が考えられています。

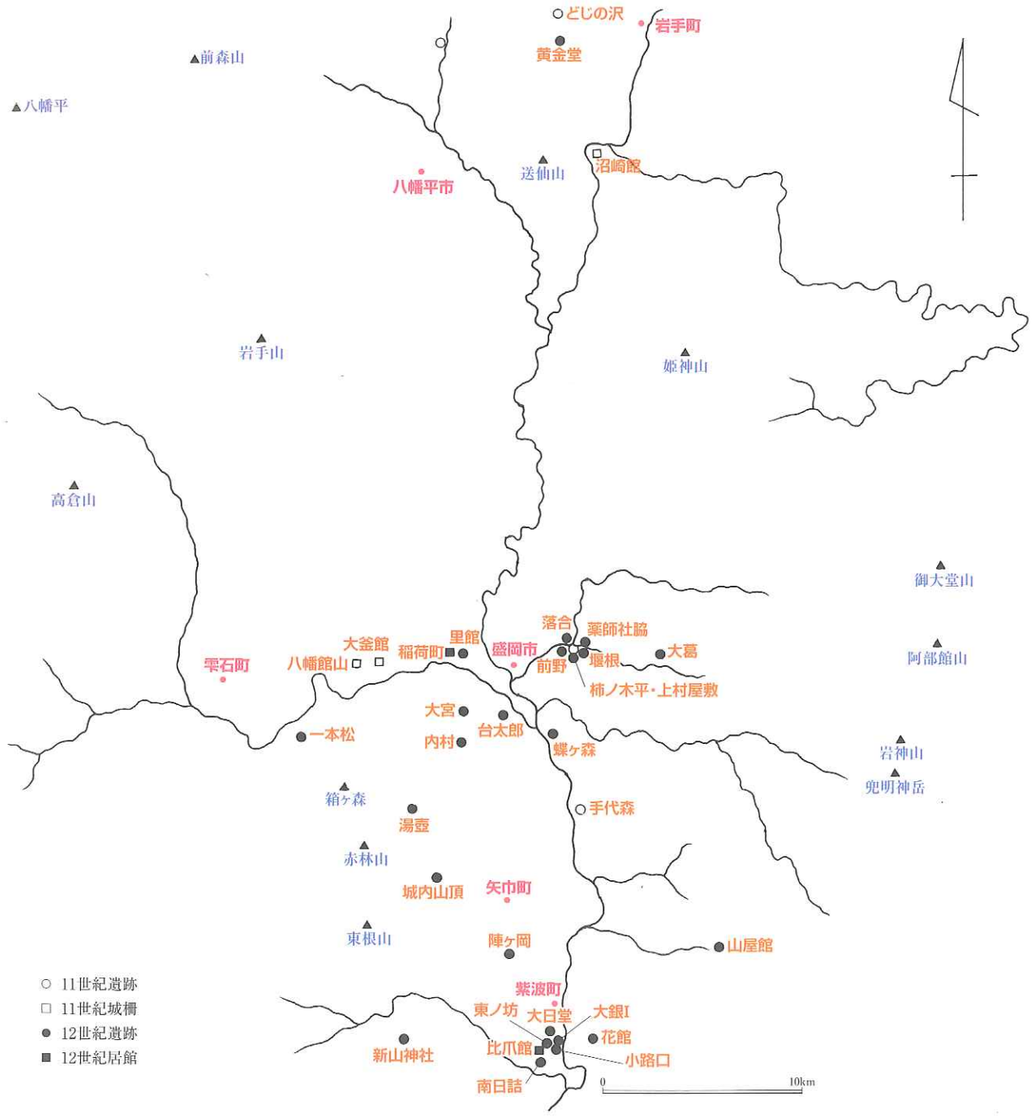
こうした寺社の造営や手厚い保護、盛んな埋経活動は、藤原清衡による、浄土思想を基調とした国づくりが、奥州平泉の支配領域に行き渡っていたことを示しています。また、比爪館跡や稲荷町遺跡などの平泉関係の居館の存在、さらに中津川沿いの、開発領主屋敷を中心とした村落遺跡のひろがりは、奥州藤原氏や樋爪氏との関連でとらえるべきもので、この地域が、平泉を支える重要な役割をもっていたことが分かります。



東北地方12世紀遺跡の分布（日本考古学協会2001に加筆）

どじの沢小堂跡瑞花双鸞八稜鏡（岩手町教育委員会所蔵）

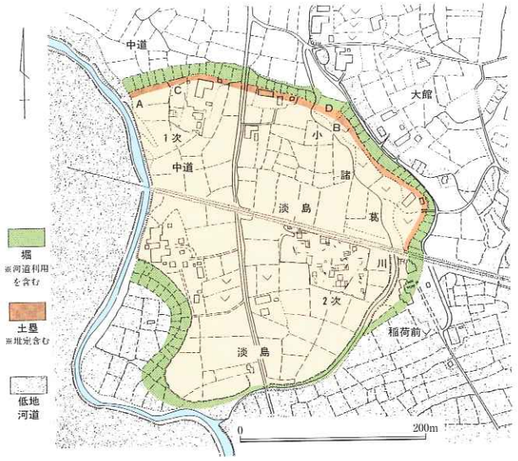
どじの沢小堂跡小鰐口（岩手町教育委員会所蔵）



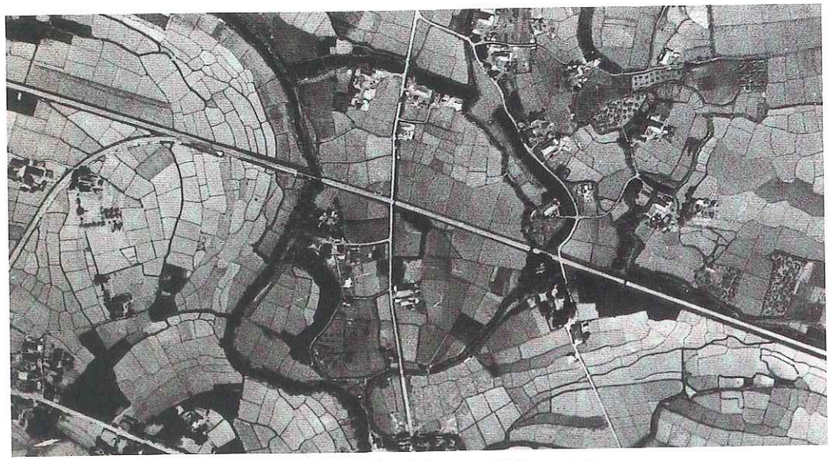
岩手・斯波郡内11世紀～12世紀の遺跡

2　稲荷町遺跡

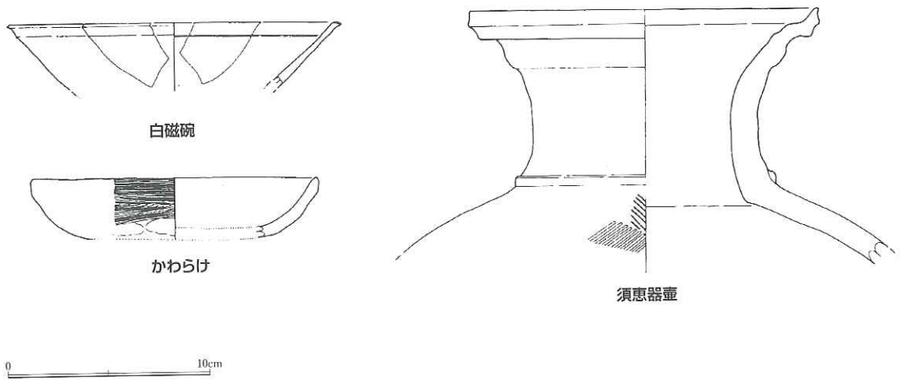
斯波郡の比爪館とよく似た居館跡が、盛岡市でも確認されています。雫石川と諸葛川との合流点にある、稲荷町遺跡は、低い段丘上にあり、盛岡市大館町と稲荷町に跨って存在します。大館は遺跡の北東側の字名ですが、おそらくはこの居館に由来する字名と考えられます。この遺跡も径300mほどの不整形なプランであり、西側と南側は2mから4mの落差のある段丘崖です。北側と東側は、幅12m程度の堀が、弧状に廻ります。内部からは2間×5間や2間×3間の建物、縁の付く建物、竪穴式建物が確認され、郭内に屋敷群を形成していることが確認されました。出土遺物は少量ですが、手捏かわらけと中国白磁碗。須恵器壷、渥美の大甕破片などが出土しています（平成12年罹災）。遺構の重複が少ないことや、出土遺物が少量であることから、12世紀後半の短期間営まれた居館です。しかし、居館の内容は柳之御所遺跡の堀内部地区や、比爪館の規模、構造に近似しており、この遺跡も奥州藤原氏関連の居館と推定されます。



稲荷町遺跡（盛岡市）



稲荷町遺跡航空写真（盛岡市教委　1994）



稲荷町遺跡出土遺物

3　中津川沿いの村落遺跡

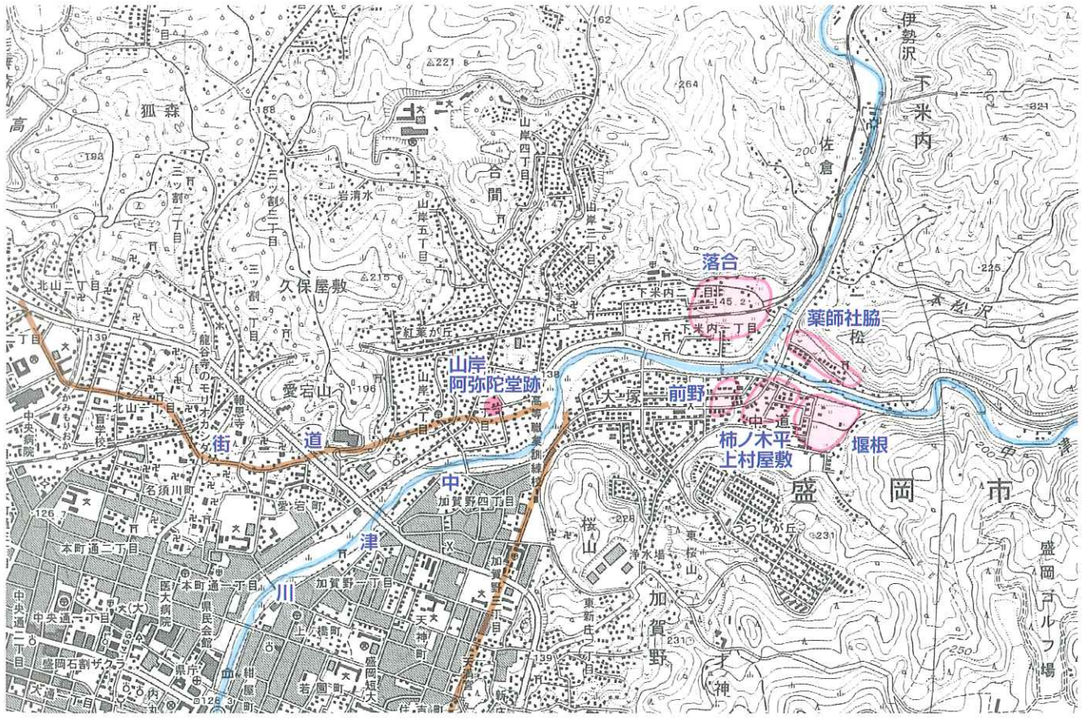
盛岡市市街地の東方、中津川と米内川合流点の浅岸、下米内には、12世紀の集落遺跡が、集中しています。16世紀末の、南部氏による、盛岡城下開設以前の街道は、現在の市街地東方の山裾を通じており、東の閉伊郡へ向かう、街道の分岐点が、この浅岸付近であったと、伝えられています。

中津川南岸の浅岸柿ノ木平から前野にかけて、山側から堰根遺跡、上村屋敷遺跡、柿ノ木平遺跡、前野遺跡があります。このうち、堰根遺跡から柿ノ木平遺跡にかけては、山麓の段丘上にあり、堰根遺跡からは大小の掘立柱建物や竪穴建物、土坑で構成される集落が確認されています。建物には四面または二面に廂を持つ格式の高いものがあり、これらは2間×3間、1間×3間程度の付属棟があり、屋敷を構成しております。周辺から中国の白磁、青磁の碗類、白磁の壷、褐釉陶器、手捏かわらけ、常滑、渥美、珠洲、須恵器系の甕や壷、捏鉢などの陶磁器類。鉄鏃、鉄鍋などの鉄製品が出土しています。上村屋敷遺跡でも同様の陶磁器類が出土し、柿ノ木平遺跡では集落の一部が確認されています。

段丘下の微高地にある前野遺跡は、溝の廻る2間×3間の仏堂または社殿らしい建物。2間×3間に下屋の伴う建物や竪穴建物があり、仏堂または社殿の溝からは、ロクロかわらけと須恵器系波状文四耳壺の破片が出土しています。

中津川対岸の落合遺跡では、現状の用水堰の下に重複する12世紀の大溝が確認されました。幅3m以上、深さ1.2mの規模で、底面近くから12世紀のロクロかわらけが出土しています。現状の用水堰は米内川から取水され、下流の下米内一帯まで灌漑するものですが、この水田用水堰が12世紀以来のものであることがわかりました。この北側には、7間×2間の身舎の四面廂の建物を主屋とする屋敷遺構が確認され、周辺には小規模な建物や、溝の廻る社殿または仏堂と見られる建物が存在することから、開発領主の屋敷と村落の遺構と考えられます。

中津川両岸の12世紀遺跡は、奥州藤原氏関連の開発領主が存在し、現在の盛岡付近の政治拠点としての重要性から、街道に面した中津川両岸の開発が強力に進められたことを示しています。大規模な用水堰の開削は、人口の増加を支えるため、土地の生産力を高めて食料の増産を図るものです。このあたりの遺跡からは、12世紀以後の中世陶器も散見され、落合遺跡の北側には佐々木館、浅岸の南西側の、獅子ヶ鼻（通称妙泉寺山）にも、中世城館跡があり、上村屋敷遺跡では、16世紀の小規模城館と屋敷遺構が確認されています。平泉以後もこのあたりの村落は存続しており、室町時代には不来方の福士氏の支配下に入ります。中世、盛岡付近の人口の中心は、東方の中津川両岸と街道筋の村々にあったと考えられ、それは奥州藤原氏に関係する、開発領主によって開かれた村が、基盤になっておりました。



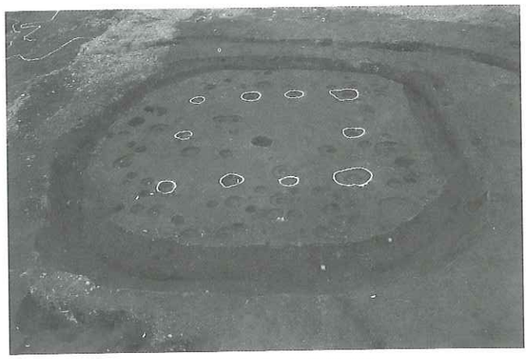
中津川沿いの12世紀遺跡

堰根遺跡建物群

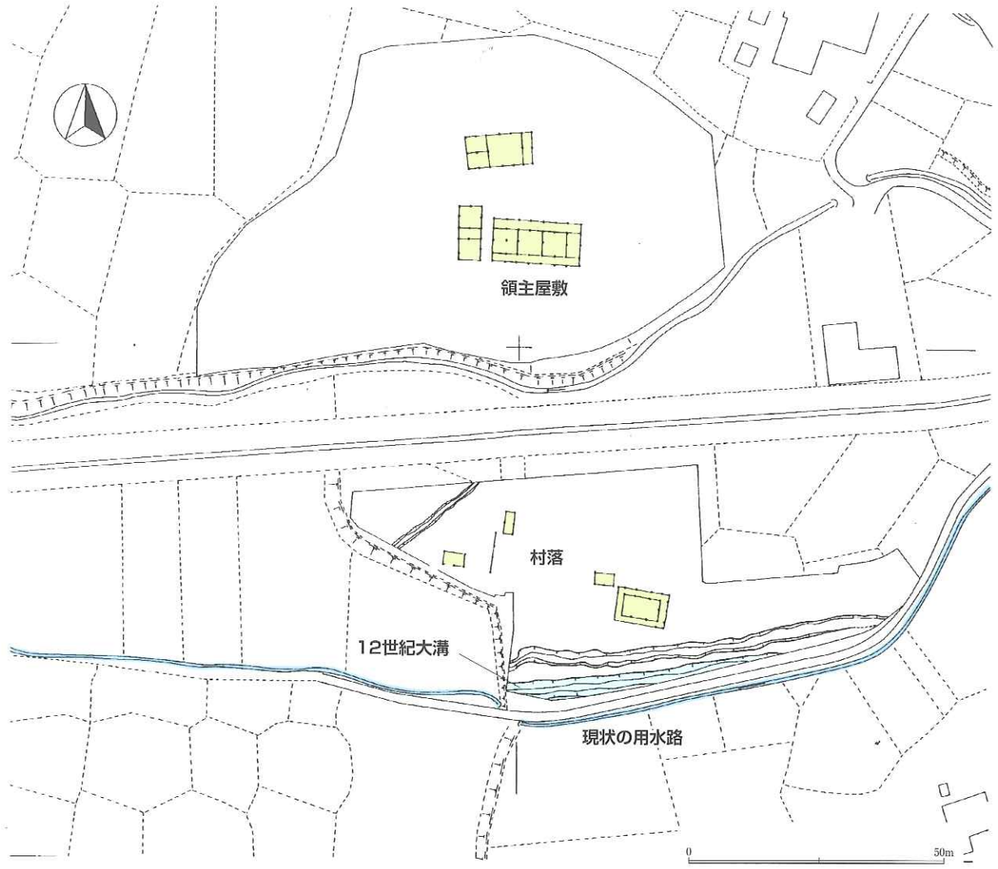
常滑片口捏鉢

堰根遺跡陶磁器

上村屋敷かわらけ



前野遺跡堀立柱建物跡



落合遺跡

堰根遺跡

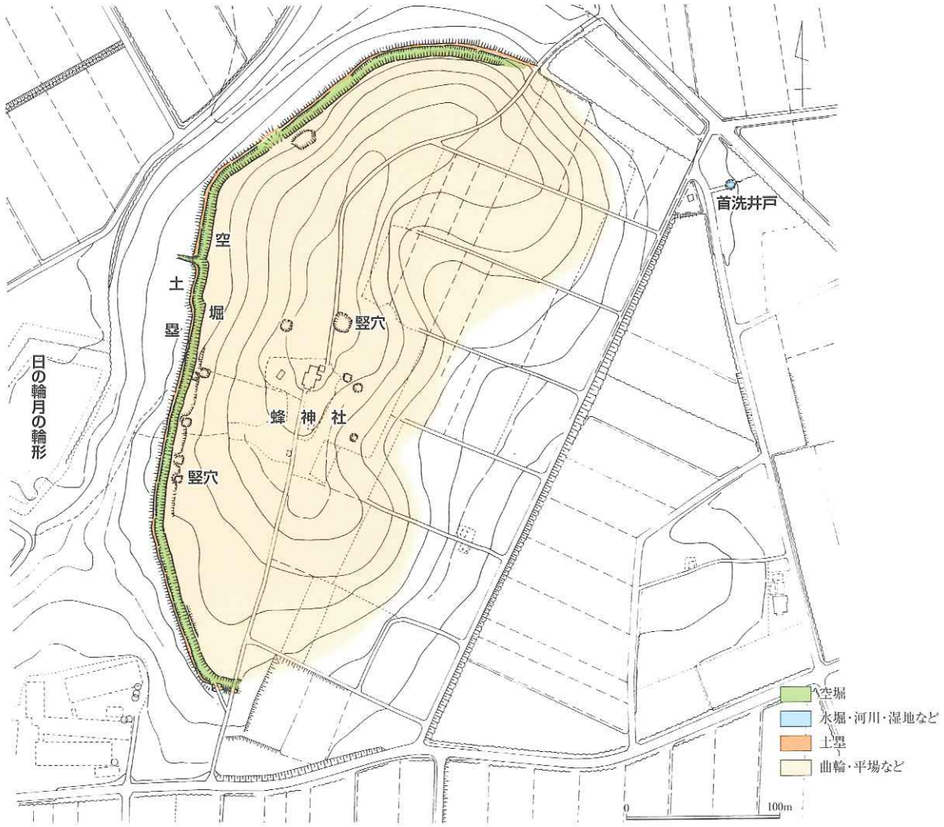
Ⅳ　文治五年奥州合戦と鎌倉幕府の支配

文治5年(1189)7月19日、源頼朝は、関東、北陸から、南九州の薩摩に至るまでの軍勢を引き連れ、鎌倉を進発し、奥羽両国に侵攻します。8月10日には阿津賀志山(福島県伊達市)二重堀の堅塁を突破した鎌倉軍は、藤原泰衡を追い、8月22日、平泉に入ります。このとき泰衡は既に平泉を退去しており、頼朝は9月4日斯波郡陣ヶ岡(紫波町)に陣を進めました。この前日、比内郡贄柵において泰衡は郎従河田次郎に討たれ、河田が泰衡の首級を陣ヶ岡に届けたのは9月3日、9月6日には首実検で泰衡の首級と確認され、河田次郎は斬首されます。9月12日頼朝はさらに北上し、同日夕刻に岩手郡厨川に到着。厨川館に宿館を定めこの地に七日間滞在します。厨川到着の12日、岩手郡は甲斐御家人の工藤小次郎行光が拝領し、盃酒、垸飯(おうばん)を献じたことが、吾妻鑑に記されています。岩手郡はかつての奥六郡最北の郡であり、藤原氏時代には、平泉藤原氏支配下中核域の北端でした。ゆえに、岩手郡の地頭任命は、鎌倉軍による平泉攻略が成就したことを公にするものでした。9月20日に平泉において、源頼朝が奥羽両国の吉書初めと合戦の論功行賞を行う8日前のことです。また9月15日、比爪館より逐電していた樋爪俊衡、本吉季衡、太田師衡、河北忠衡の樋爪氏一族が厨川において投降し、樋爪俊衡は本所比爪を安堵されます。

鎌倉武士のなかで、最大の論功行賞を受けたのは、武蔵の葛西清重で、奥州総奉行に任じられ、現在の岩手県南部から宮城県北東部に至る広大な地域を与えられました。岩手郡地頭には工藤氏。斯波郡には足利氏が鎌倉時代の初期から入っていたと考えられています。稗貫、和賀郡には中条氏(稗貫氏、和賀氏)。岩手郡の北、広大な糠部は、北条氏得宗領でした。閉伊郡の閉伊氏は近江佐々木氏の一族で、早くから北条氏に属していました。

鎌倉時代、北条得宗家の権力が強まるにつれて、各地の地頭たちの、北条家への家臣となるものが多くなり、地頭職も北条氏へと移行していきました。岩手郡地頭も工藤氏から北条氏へと移りました。

盛岡市台太郎遺跡には、一重、二重の堀で囲まれた大形の居館跡が確認されており、出土陶磁器から13世紀後半から14世紀前半の年代と考えられています。主に鎌倉時代後半に機能した大形の居館であり、北条氏有力被官の居館と考えられます。

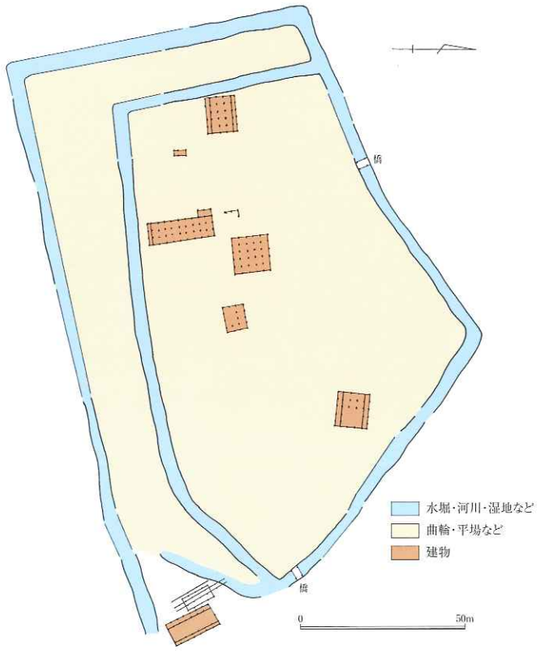


陣ヶ岡

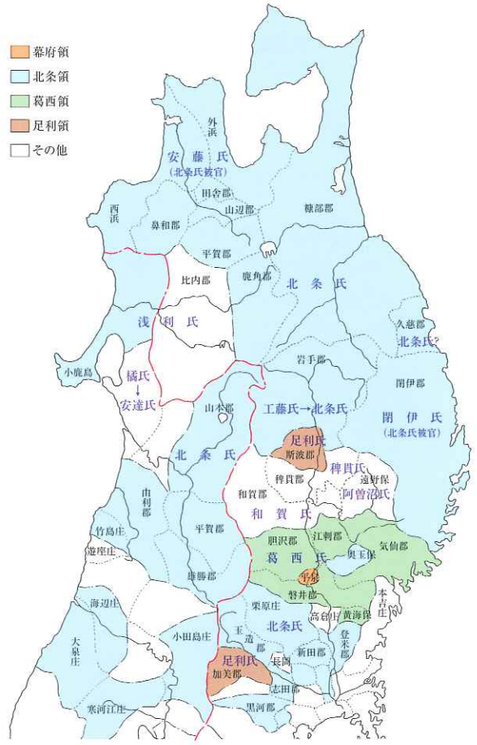
陣ヶ岡遠景

陣ヶ岡空堀

(伝)泰衡首洗井戸

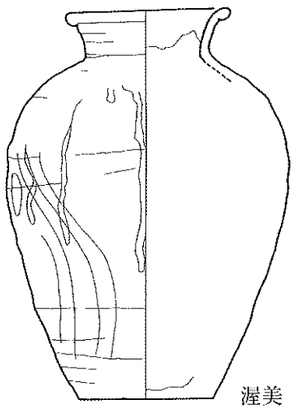


台太郎遺跡

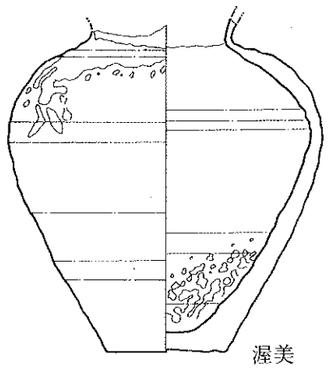


鎌倉時代後期の地頭

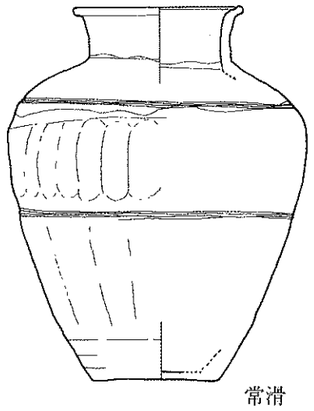
北条氏は、鎌倉幕府成立の当初から、糠部や津軽など、北方世界との接点を押さえていました。津軽の豪族安藤氏は、北条氏御内人で、蝦夷管領として北方交易や日本海交易にも大きな影響力を保持していました。南北朝期以後に、糠部に勢力を拡げる南部氏も、鎌倉時代のうちから、奥羽のいずれかの地に所領が存在したと考えられていますが、詳しいことは判っておりません。



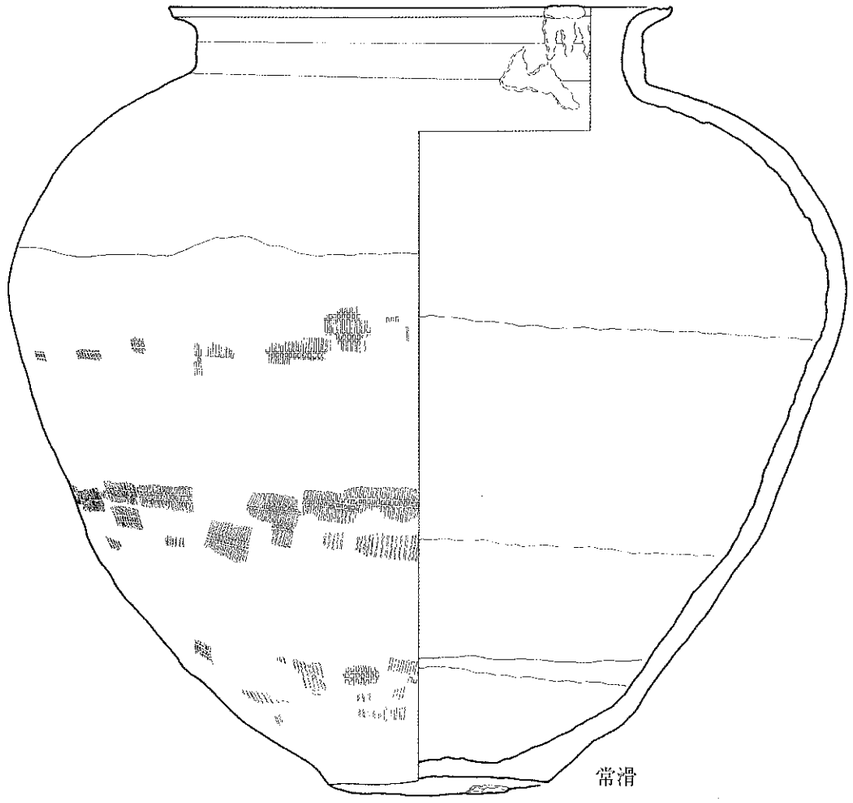
一本松経塚
（日本考古学協会 2001）



台太郎遺跡



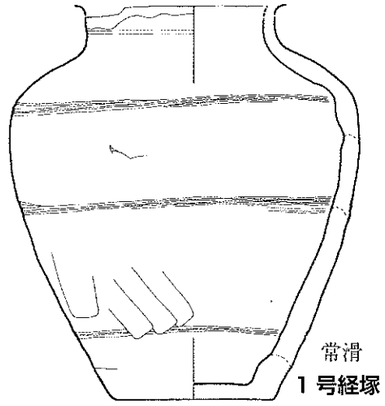
湯壺経塚
（日本考古学協会 2001）



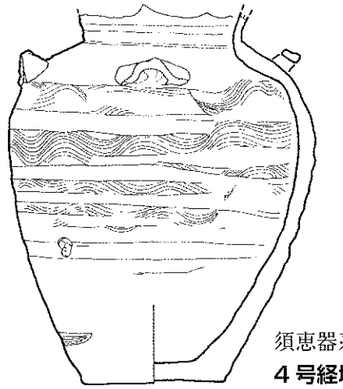
内村遺跡

0　20cm

実測図（盛岡市）

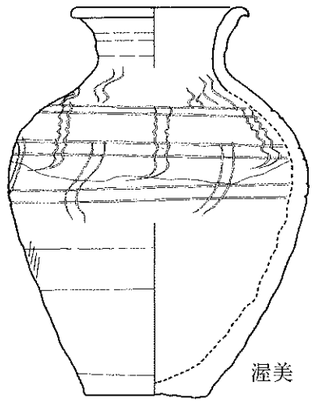


1 号経塚

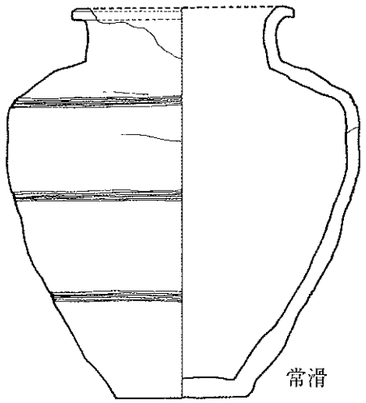


4 号経塚

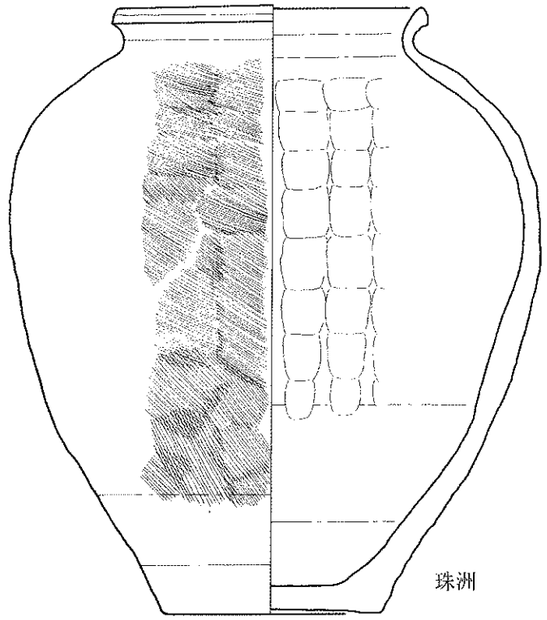
山屋館経塚
（岩手県埋文センター 1997）



城内山頂遺跡（西野 1991）



新山神社（桜井 1991）



南日詰遺跡（桜井 1991）

0　20cm

実測図（紫波郡矢巾町・紫波町）